



教員研究論文

FACULTY PAPERS

「隠喩としての病い」の現在—有名人の「がん告白」に照らして

The Current Myth of “Illness as Metaphor” : Referring to the Confessions of the Cancered Famous on the 1980s~2000s in Japan

真鍋祐子*

Yuko Manabe

はじめに

私が学際情報学府で開講している「文化・人間情報学特論Ⅰ」では今年度、本学の「日本・アジア学講座」の一環として、先端科学技術センター・赤座研究室傘下の「アジアがんフォーラム」（代表者・河原ノリエ）より協力を得て、外部講師を招いてのオムニバス講義を実施した¹。そのなかでスーザン・ソントグの「隠喩としての病い」を読み直し、がんの表象という問題について考えを巡らせていたときに、携帯サイトを通じて、次のようなニュースが目飛び込んできた（livedoorニュース、2010年11月4日15時20分付）。

「声優の平野綾が持病を告白したことがネットで話題となっている。

11月2日（2010年）にツイッターで、以前から頭部に腫瘍があることを明かした。中学生のとき偏頭痛になって検査を受けたときにわかったという。『下垂帯(ママ)腺腫』というもので、腫瘍が神経を圧迫してたまに目が見えなくなったり、言葉が出しづらくなったりすること

がある。中学のときは記憶が飛んだこともあるのだそうだ。

手術も検討したが、鼻の穴を砕く必要があり、声質が変わってしまうので声優としてできないと判断した。今も年に1回病院に行って腫瘍が悪性になっていないか検査している。普段は辛いものや冷たいもの、酒類についてドクターストップがかかっているとのことだ。現在は『自分用の薬持ってるし平気!』『大丈夫!慣れた!』と書いている。

平野の突然の告白にネットは騒然となり、ファンからは『心配です』『僕も小さい頃同じような病気を持ってました』といった反応が多数寄せられている。」

この平野の告白を読んだとき、いささかの違和感を覚えた。極めて私的な話になるが、私の母は乳がんが肺へ、さらに甲状腺、脳へと転移して、2002年に死亡した。主治医から告知を受けたとき、母は脳への転移をことのほか悔しがり、「よりによって頭をやられた」として

*東京大学大学院情報学環

キーワード：隠喩としての病い、有名人、がん告白、メディア、がんの脱神話化/再神話化

自分を恥じ、「情けない」と自分を責め、絶対に他言しないよう家族に固く口止めをした。それは少なくとも彼女にとって、ソントグが「癌は、(略)はい、そうですとは答えにくい場所を攻撃してくる」として、結腸、膀胱、直腸、乳房、子宮頸、前立腺、睾丸をあげたのと〔ソントグ 1978=1992:25〕、同様の感覚ではなかったろうかと思われる。

ソントグがあげた子宮頸がんに関しても、平野の「告白」からほどなくして、次のような記者会見の様子が、「原千晶が結婚！子宮がんを乗り越え」と題して携帯サイトに紹介された（FC2ブログ、2010年11月16日10時5分付）。

「子宮がんの手術を受け、番組制作会社のプロデューサー（37）と結婚していたことが明らかになった女優でタレントの原千晶（36）が15日、都内で会見しました。

原は05年2月に子宮頸（けい）がんが見つかり子宮温存手術を受けましたが、2009年12月に子宮頸がんとう子宮体がんを併発する形で再発が発覚。

今年1月に子宮全摘出手術を受け、5月まで抗がん剤治療を受け、現在は月1度の検査などを受けているとのこと。

1度目の手術を受けてから『悪いところを全部とったので治ったと思い、定期検診を受けるのを怠ってしまった。甘かった』と反省の弁。

すべての女性に対し『自分を大切にしてほしい』とメッセージを送りました。

闘病生活を支えたのが07年に出演したドラマで知り合った夫。

『子供を授かることができなくなり、それで

も“君が元気になってくれるのが一番の幸せ”とってくれた』と目を潤ませたそうです。

互いを『ちーちゃん』『Pちゃん』と呼び合っていると『（挙式は）来年の暖かい時期に親しい人を集めてお祝いしたい』と笑顔で話しました。

（以下、略）

子宮全摘手術で「子供を授かることができなく」なったという子宮頸がんの「告白」が、同時に「君が元気になってくれるのが一番の幸せ」としてくれる愛情あふれる男性との結婚報告も兼ねていたこと、またすべての女性に向けて「定期検診」の大切さを訴えるという語り、私はなんだか「とってつけた」ような居心地の悪さを覚えた。がんをめぐるエピソードが美談として神話化されたように感じられたのである。

がん患者の家族・遺族としての体験と実感に照らしてみるとき、平野と原の「告白」は今日、ネットというメディアを通じて「腫瘍＝がん」がいかに表象されているかを端的に示す好例と受け止められた。

本稿は2010年11月7日に行なった「文化・人間情報学特論Ⅰ」の講義のノートに加筆・修正を施し、論考化したものである。その目的は、ソントグの議論に依拠しつつ、1993年に記者会見でがん闘病を告白した逸見政孝以降、有名人によるメディアを通じた「がん告白」という現象のマクロな変遷を追い、あわせて著書やネットに綴られたミクロな語りを考察することで、がんをめぐる表象の現在を明らかにすることにある。

なお本稿で使う「有名人」とは、石田佐恵子が「テレビ・メディアの時代に、〈有名人〉をつくりあげる装置としてより強力なものとなっていくのは、さまざまなテレビ番組のジャンル

のうち、現実世界に言及する形式を持った番組—『テレビニュース』『スポーツ中継』『ワイドショー』といったもの—であった」〔石田 1998：70〕と述べるところの、商品としての

スーザン・ソントグが語る「隠喩としての病い」（1978年）

1) 隠喩と隠蔽

ソントグが「隠喩としての病い」を語るとき、そこには次のような含意があるという。

「ソントグは、原因や治療法がしっかりと確立されていないために致死の病いの上に投射されてしまう患者の側の不安の生みだす空想と、その病いを究明し治療しようとする医学者や医師の側の情熱が必要とする思考の枠組みと、政治や芸術や社会のさまざまな制度がそれらを利用して作りあげる病いの神話とをみすえながら、そこに共通するものを〈隠喩としての病い〉と名づけ、それを解体しようとするのである。」〔富山 1992：298〕

1978年、ソントグ自身のがん体験を踏まえて書かれた「隠喩としての病い」は、正体不明なるがゆえに神秘化されやすい「隠喩に飾りたてられた病気」として、19世紀の「結核」に對比させつつ、主に20世紀の「癌」²を取り上げている〔ソントグ 1978=1992：7〕。

19世紀の結核、20世紀のがんに共通するのは、正体不明の「ノックもせずに入り込んでくる病気」「ひそかに侵入する非常な病気」と認識されてきたこと、ゆえに病気自体が根拠のない恐怖心をかきたてる「神秘的な悪」という

「隠喩」をはらんできたという点である。このようにひとつの謎として強く恐れられている病気は道徳的な意味で伝染するとされることもあり、病人と接することは違反行為、ひいては「タブーの侵犯」と認識され、病名自体が魔力をもつとさえ考えられてきたという〔ソントグ 1978=1992：7-8〕。19世紀の結核、20世紀のがんに共通するもうひとつの点は、その病いが死を意味していたことにとまなう「隠蔽」ということである〔ソントグ 1978=1992：10〕。

結核とがんを語源的に比較すると、いずれも古代後期から19世紀半ばにいたるまで「異常な突起の一種」と認識され、体が蝕まれてゆくプロセスとしてとらえられていたという。しかし1882年に結核が細菌性の伝染病であることが発見され、正体不明の不治の病いではなくなったことで、1920年代末以降、結核をめぐる空想が提起していた問題の大半を引き継いで、がんをめぐる現代的な空想が形をなし始めたのだという〔ソントグ 1978=1992：13-16〕。たとえば、すでにノヴァーリスが1789年頃の書き込みに、「立派に一人前の寄生体である一成長し、産まれ、産み、みずからの構造を持ち、分泌し、食する」と記したように、が

んは「魔性の懐胎」を意味し〔ソントグ 1978 = 1992 : 19〕、よって結核以上に隠蔽が徹底される。それは「この病気が死刑宣告である（あるいは、そうみなされる）からではなく、そこに何かおぞましいものが—不吉なもの、感覚的におぞましく、吐き気のするようなものが感じられるからだ」という〔ソントグ 1978 = 1992 : 12〕。こうした「神秘的な悪」の属性をもつがんをめぐっては、「例外的にしっかりした知的な患者でなくては、耐えられまい」として患者に対してつく嘘と、「愛情生活とか、昇進のチャンスとか、仕事とかが駄目になる恐れがある」として患者が他者に対してつく嘘という、二つの隠蔽が付帯する〔ソントグ 1978 = 1992 : 10 - 11〕。20世紀以降、がんの特化された「神秘的な悪」の病気という役割について、ソントグは「結核の場合のように、いつの日にかその原因が究明されて効果的な治療法が見つかるまでは続いてゆくことだろう」と述べている〔ソントグ 1978 = 1992 : 8〕。

本稿は1978年に投げかけられたこのソントグの予見に対するレスポンスでもある。私の母にとって、脳に転移したがんは、その病気自体が根拠のない自責や恥の意識を煽りたて、誇りをいたく傷つけるものと認識されたがゆえに、

2) 隠喩としての「結核」と「がん」

ソントグは著書の随所で、結核と対比させながら、がんを語る。まず、結核は肺という器官だけの病気とされるのに対し、がんはどの器官にも現われ、体の全体に関わる病気とされる〔ソントグ 1978 = 1992 : 16〕、としたうえで、隠喩として語られてきた結核とがんとの間

彼女は他者に対する隠蔽を強く望んだ。母は21世紀に入ってなお、次章で言及する女優・塩沢ときと同様、「隠喩としての病い」として「がん人生」（塩沢の著書のタイトル）を生きたことになる。それは冒頭にあげた平野の告白から10年も遡らない時期の出来事である。世代や職業などの違いはあれ、同じ「脳にがん／腫瘍」を抱えた立場として、両者の懸隔には目を見張るものがある。次章で詳述するが、実際、有名人の「がん告白」の変遷を見てゆくと、2000年代初頭にひとつの分岐点が見出され、はっきりと構造的変化の糸口が認められる。そうした「隠喩としての病い」としてがんをとらえる認識の隔たりは何に起因するのか、その間にいったい何が起こったのか？

有名人の「がん告白」という現象を突き詰めた結果がいずれも2010年11月になされた平野と原の告白であったと、私はとらえている。「さまざまの制度」のひとつとしてのメディアが作りあげた「病いの神話」をたぐり、この問題を論証してゆくプロセスそのものが、2004年にがん死したソントグへの応答になりえるものと確信している。

の、次のような対照性を指摘する。

「結核は両極端の間をゆれ動く病気で、蒼白い顔が紅潮したり、元気澆刺としていたのが無気力になったりする病気とされる。／これに対して癌の方は、異常な、最後には死につながる

腫瘍が（これは外から見えることもあるが、体内に生ずる例が多い）—これがゆっくりと、絶え間なく、一步一步生育してくる病気である。」〔ソントグ 1978=1992：16-17〕

「幸福感、食欲増進、性欲増大などは結核の特徴とひと頃は考えられていたものだが、それは今でも変わらない。／癌は生命力を阻害し、食事をまったく食欲をそそらない苦行にしてしまふとされる。」〔ソントグ 1978=1992：18〕

「結核は人を性欲過剰にし、異常なまでの性的魅力を付与するが、／癌は人から性的な面を抜き取るとされる。」〔ソントグ 1978=1992：18〕

「結核は崩壊であり、発熱であり、肉体の軟化である。それは液体性の病気である—肉体は粘液と化し、痰となり、ついには血ともなる—それは空気の、よりよい空気を必要とする病気でもある。／癌は退化である。肉体の組織は変質して、石となる。（略）だが、この塊は生きている。自分の意志をもつ胎児だ。」〔ソントグ 1978=1992：19〕

「結核の場合、人は『消耗』され、燃え尽きる。／癌患者は異質の細胞に『侵略』され、その細胞が増殖して、体の機能を衰弱・停止させてしまう。」〔ソントグ 1978=1992：20〕

「結核による死は安楽死であるのに、／癌による死は見るも無残という。」〔ソントグ

1978=1992：23〕

「結核は体の上部の霊化された部分にある肺が持つとされる性質をひきうけるのに対して、／癌はどうかと言えば、はい、そうですとは答えにくい場所（結腸、膀胱、直腸、乳房、子宮頸、前立腺、睾丸）を攻撃してくる。」〔ソントグ 1978=1992：25〕

「結核の方はあてやかな屢々叙情的な死につながるものと考えられたりしたが、／癌が詩の素材になることは滅多にないし、たとえなつたとしても、スキャンダラスな扱いしかうけないだろう。この病気を美化することは想像するだに至難なことと思われる。」〔ソントグ 1978=1992：28〕

「かつて結核とは情熱過多から来るもので、官能に惑溺する人々を悩ますものと考えられたが、／癌とは情熱不足の病気であり、性的には抑圧・抑制され、自然に振舞えず、怒りを表出することのできない人々を悩ますものと信じられている。」〔ソントグ 1978=1992：30〕

以上にあげた対比的な言辭を総じていえば、以下ようになる。

「結核は両義的な隠喩で、災厄であると同時に繊細さの象徴でもある。／癌の方は災厄としか見られず、隠喩的というなら、内なる野蛮人でしかない。」〔ソントグ 1978=1992：93〕

それゆえ結核が「人を靈化する、繊細な病氣」とされ、結核患者がより靈的な者として描かれるのに対し、癌患者は「内なる野蛮人」によって自我を超越する力を奪われ、恐怖と苦悶にまみれる者として表象される〔ソントグ 1978=1992：23-24〕。結核という病氣が靈性の隠喩とすれば、がんという病氣はどこまでも肉体的である。ソントグはいう。

「隠喩的な意味では、肺の病氣とは魂の病氣である。あたり構わず攻撃をしかけてくる癌は、肉体の病氣だ。それは靈的な何かの存在を立証してみせるどころか、肉体とは、悲しいかな、徹頭徹尾肉体であることを立証してみせるのみである。」〔ソントグ 1978=1992：26〕

がんが肉体の病氣であるゆえんは、結核を発症する肺が靈化された体の上部にあるのに対し、がんは「体の器官のヒエラルキー」とはかわりなく巢食い、増殖することからも明らかである。「体の器官のヒエラルキーにおいては、肺癌は直腸癌ほど恥しくないと感じられたりする」〔ソントグ 1978=1992：25〕というソントグの感覚に、私は強い共感を覚える。結核は体力減退、微熱、咳、気怠さといった目に見える徴候をともないながら、ハンカチへの咯血などドラマティックに噴出することもある。また活力の喪失ゆえに生き生きしてくる、熱からくる頬の赤みが健康の印に見えるなど、元気が戻ったように映ることが実は死の前兆だったりするという。こうした結核が示す両極端の症候は、繊細な魂の病氣とも受け止められ

る両義性を秘めているが、他方、「癌には真の症状しかない」〔ソントグ 1978=1992：17-19〕。がんの肉体性とは、実に、その身も蓋もなさにあるといえよう。

そのような「下卑た肉体を解体し、人格を靈化し、意識を拡げる結核による死を利用」することで、新しい角度から「死の品性」を高めることに成功したのが、19世紀のロマン主義者たちである。彼らは結核をめぐる空想を通して死を美化し、叙情詩的な死の語りという形式を編み出した〔ソントグ 1978=1992：28〕。がんが「下卑た肉体」の表徴の最たるものとして捨象され、後述する「病氣懲罰説」の的とされた一方で、結核は上品さ、繊細さ、感受性の細やかさなどの指標として表象された。

産業革命によって社会的、地理的な移動が可能になることで、価値や地位が所与のものではなくなったのに取って代わり、すでに18世紀には、各人が新しい服装観および新しい病氣への態度を通じて、自らの価値や地位を主張するようになっていた。すなわち「服装（身体を外から飾る衣裳）と病氣（身体の内側を飾るもののひとつ）とは、自我に対する新しい態度の比喩となった」のである〔ソントグ 1978=1992：40-41〕。こうしたファッションとしての結核という観念は、19世紀になると「礼節」の次元にまで高められた。この点について、ソントグは次のように述べている。

「肺病は顔に出るものと理解されていたのに加えて、顔色こそ19世紀の礼節の要でもあった。飽食は不作法、病的な顔つきであるのが魅力的とされたのである。」〔ソントグ 1978

= 1992 : 41]

ソントグは、特にフランスとドイツの思想、芸術、文化に強い関心をもって、文芸批評活動を続けてきた。よって私は、彼女の論じる「隠喩としての病い」が全て日本にも適用されるという立場をとらない。だが、ここまで記してきた、ある種の既視感を覚えたことも事実である。がんがどこまでも肉体の病気であることを

3) がんをめぐる「病気懲罰説」

がんは「下卑た肉体」にはらませられた「内なる野蛮人」である。ロマン主義者たちによって「死の品格」を見出されることで神話化され、さらに病因が突き止められることで脱神話化された結核に比して、今日の医学の目覚ましい進歩を踏まえても、がんはいまだ正体不明の病気といわざるをえない。身も蓋もない肉体性と「神秘的な悪」という病気観ゆえに、昇華と美化の対象から捨象されたがんは、ヴィルヘルム・ライヒがこれを「感情的に諦めてしまうところから来る病気—生物エネルギーの萎縮、希望の放棄」と定義してがん心因説を流布したことに端を発して、病気懲罰説の対象とみなされてきた。ソントグは次のように述べている。

「広く信じられている病気の心因説では、病気になるのも回復するのも最終的には病人の責任とする。おまけに、癌は単なる病気ではなく魔性の敵だとする慣習があるものだから、癌は命を奪う病気であるのみならず、恥ずべき病気ともなってしまうわけである。」〔ソントグ 1978=1992 : 87〕

普遍的な現象だとみなしても、おそらく異論を差し挟む者はないだろう。むしろソントグが、結核が魂の病気として昇華され、結核患者がより美しく霊化されるとする文脈を読み解くくだりにおいて、私は日本的な文脈に立った新たな角度からの文芸批評として、三浦綾子や神谷美恵子などをめぐる「病いの神話」を解体する必要性を強く感ずるようになった³。もちろん、これは他日を期すべき課題である。

がんを「魔性の敵」とみなす文脈での中心的な隠喩は、「(癌細胞が)体を侵す」「植民地を作る」「(体の)防衛力」「(放射線で)空爆される」「(癌細胞を)殺す」、あるいは「兵糧攻め」⁴など、「戦争用語」から借用されたものであるという〔ソントグ 1978=1992 : 97-98〕。このように医者や患者自身によって、がんは「内なる野蛮人」が、闘いを挑み、攻撃すべき対象として他者化された結果、さらなる歪曲が施されることになる。再びソントグの言葉を引用したい。

「癌のイメージが戦争計画なみにふくれあがるにつれて、それ以外の歪曲も生じてくる。結核は意識の霊化をされるとされたが、癌の方は(心を持たぬ何物かによって)意識が圧倒され、抹消されることと理解されている。結核においては、人はみずからを喰い、繊細になり、核心まで、本当の自分にまでおりてゆく。癌においては反知的な(『原始的』で、『未発達』の、『隔世遺伝的な』)細胞が増殖し、人は自分ではないものにとって替られてゆく。免疫学

者は体の癌細胞を『非自己 nonself』と分類している。』〔ソントグ 1978=1992:101〕

がんが脳に転移したことについて、母が「頭をやられた」という戦争の隠喩を用いて、その事実を恥じ、自責したことの意味が、ここでようやく明白になる。「意識が圧倒され、抹消される」、そして「反知的な細胞が増殖し、人は自分ではないものにとって替られてゆく」という場合、増殖の部位が「よりによって」脳であることは最も致命的ではないだろうか。癌細胞に脳という要衝への浸行を許したことの不覚を恥じ、反撃むなしく戦争計画に敗れた自分を責めたのであろう。がんを「非自己」として他者化するまなざしは、「病氣懲罰説」となって患者自身へも反転される。

さらに、がんの「非自己」化は、政治的な事件や状況を「致命的な病氣のイメージ」にたとえる隠喩において、より際立ってくる。がんは、手の施しようもないほど徹底的に悪い状況の隠喩として、その罪を押し付けられ、罰せられるべきスケープゴートとされる。たとえばヒトラーが1930年代に行なった「ユダヤ人問題」に関する演説では、「癌を治療するには周辺の健康な組織の多くを切除しなくてはならない」とされ、民族浄化が癌治療のアナロジーをもって語られた。すなわち「ナチスにとって癌のイメージは、結核向きとされる『穏やか

な』治療ではなく、『根源的な』治療を要求するものであった」という〔ソントグ 1978=1992:123-124〕。このような暴力性は、がん患者に対することさら厳しい「病氣懲罰説」の観念に、すでに内包されている。

最後にソントグは壊疽との対比を通じて、がんが今なお得体の知れない病氣であること、死につながることをもって、さらには、その災禍に見舞われた社会の一員として罹患する流行病（ペスト、コレラ、チフス）からも差異化された「つねに個人を狙う神秘的な病氣」として〔ソントグ 1978=1992:56-57〕、「癌こそが病氣の隠喩のうちで最も『根源的なもの』の地位にとどまっている」と指摘する〔ソントグ 1978=1992:128〕。1975年に肺がんで没した児玉隆也が闘病記で証言したがんをめぐる自他の認識は、ソントグの洞察と驚くほど重なり合う〔児玉 1975=1980〕。よって、このソントグの見立て自体に異論はない。

しかし、そこにメディアの多様化という変数を加えたとき、今世紀日本のがんという「隠喩としての病い」をめぐる状況は、文芸批評の手法を駆使してソントグが描出したそれとは、いささか様相を異にしているといわざるをえない。

次章ではメディアを介して発信される有名人の「がん告白」をたどりながら、究極的には平野綾と原千晶の告白に収斂される、「隠喩としての病い」の現在をとらえてみたい。

有名人の「がん告白」を読む

1) 隠蔽から公表へ

i) 80年代：塩沢とき

芸能界でもがんは長らく隠蔽すべきものとされてきた。管見の限り、メディアを使った最初の「がん告白」は1981年の塩沢ときであった。だが、それは舌がん発症から23年後の告白であり、本人が意図してというよりは、思いがけず『徹子の部屋』への出演依頼を受け、なりゆきでそうなった事情が少なからずあったようだ。塩沢はそのときのいきさつを、「がん告白は窮余の策」として、以下のように記している。

「何故私が……。いえ、それ以上に何を話せば良いのでしょうか。

悩みました。悩めば悩むほど、追い詰められました。

“こんなに良い番組で良いチャンスを与えてもらったのに、何も話すことがないなんて情けない。なんとかしなければいけないわ”

そうなった時、ふと頭に浮かんだのが、がんのことだったのです。

“そうだ。がんの話をしよう。それしかないわ！”

それまで、がんのことは誰にも話していません。誰にも知られていなかったのです。

ここで、がんのことを告白しよう。思い切って、今まで隠していたがんの話をしてみよう。そう思ったのです。

(略)

最初、私は取材班の方に言いました。

『ごめんなさい。なかなか話すことがなくて……』

すると、返ってきた言葉が、

『食べる話と病気の話なら、注目を集めやす

いんです』

ということなのです。

(略)

『病気の話ならあります』

そう答えたのでした。ただし、まだその場ではがんの話はしませんでした。いきなりの方が効果もあると思いましたので。

(略)

しかし、何とか本番が始まると、サラリと、ただし一番しょっぱなで衝撃の告白をしたのです。

『黒柳さん、実は私、ずっと前なんですけど、がんを経験しております』

『え!!』

黒柳さんは、びっくり。そして、絶句でした。

当然ですよ。ノッケから“私がんだったんです”は、誰だって面喰らう筈です。

聞いていたスタッフの方たちからも、ちょっとしたどよめきのようなものが起きていました。」〔塩沢 1992：148-150〕

「初めて大役をもらう時以上の、ドキドキ」とともに意を決して「がん告白」をしたという塩沢、「がん」という言葉に絶句した黒柳、どよめいたスタッフなどの言動に、当時のがんをめぐる「病いの神話」がいかなるものであったかが読み取れる。「自分の明るい元気のあるイメージが逆に暗いものになってしまうんじゃないかという心配もあった」〔塩沢 1992：151-152〕という女優としての心の揺らぎが、がんという「病いの神話」の危うさを端的に物語っている。しかし予期に反して、「がん告

白」は大きな反響と共感を呼んだという。塩沢は「がん克服の件とは関係なし」と断りつつも、率直にこう述べている。

「それ以来、思わぬ所で注目を集めてしまった私。良いことは重なるもので、その年の暮れ、『いただきます』のレギュラーの話が来ました。

(略)

しかも、この『いただきます』のおかげもあって、その後は仕事がどんどん舞い込み、どういうわけか超売れっ子。絶頂の時を迎えてしまうのです。」〔塩沢 1992：152-154〕

しかし塩沢以降、80年代を通じて「がん告白」は見られない。「がん告白」がきっかけで売れっ子になることよりも、がんをタブー視する「病いの神話」の方がいまだ強い求心力を保っていたのだろう。同じがんでも非腫瘍系の白血病は、かつて結核が担っていた若い命を摘み取るロマンチックな病のイメージを引き継いだと、ソングは言う〔ソング 1978=1992：25〕。85年に白血病に斃れた夏目雅子の場合、本人には病名が隠蔽されたというが、対外的には連日ワイドショーに取り上げられ、27歳の若さで急逝した際には「美人薄命」のイメージでその死を悼まれ、「夏目雅子=白血病」にまつわる「病いの神話」は現在も語られ続けている。実は夏目の死の3年後に乳がんを患っていたことを後に「告白」した音無美紀子〔村井・音無 2004〕の例に見るように、夏目を取りまくメディアの喧騒は、がん患者の「沈黙」とは実に対照的であった。

堀江しのぶの胃がん（88年）と松田優作の膀胱がん（89年）は、いずれも死後に明らかにされたものである。昭和天皇の場合、87年4月に「体調不良」が報じられ、9月に「慢性膵臓炎」と発表されたが、実際の病名は腺がん＝「十二指腸乳頭周囲腫瘍」であった。連日、容体を報じるメディアは「下血」という一般には耳慣れない医学用語で「がん」を仄めかし、異様なまでの自粛ムードを扇動し、強制しながらも、結局、崩御（89年）まで事実を明かすことをしなかった。2001年に子宮頸がんて死亡した久和ひとみは前年10月にがん告知を受けてからも「大量の出血で激しい貧血に見舞われ、造血剤を投与しながら（略）お腹の痛みに耐えながら、腰を浮かせて椅子に座っているような状態だった」〔久和 2001：45-46〕という。手術のためキャスターを務めていた番組を降板する際も、彼女はその理由を「私、実は体調を崩しまして」と述べるにとどめ、がんであることを伏せた。膀胱や子宮、そして胃（ソングが指摘した「飽食は不作法」を連想させるという意味で）は「体の器官のヒエラルキー」で下位に位置づけられる部位であり、まさに「はい、そうです」とは答えにくい類のがんであろう。そうした肉体性に由来するイメージの急落への恐れという問題に加えて、やはり最も切実なのは「仕事とかが駄目になる恐れ」であったことは想像に難くない。久和が子宮頸がんを発症した時期には、後述するように、すでに向井亜紀という「がん告白」の前例があった。にもかかわらず、久和が「がん告白」をしなかったのは、おそらく松田優作にも通ずると思われる「病いの神話」のゆえではないだろう

か。数年後に鳥越俊太郎や筑紫哲也などの同業者が相次いで「がん告白」したことに照らせば、21世紀初頭の久和のがん死は極めて古典的な「病いの神話」に縁どられていたといえる。

塩沢が語るがん体験も古典的な「病いの神話」そのものである。著書を通じて、塩沢は戦争用語を多用しながら「ガンと戦う意志」〔塩沢 1985：77〕をしきりに鼓舞する。後述するように、2000年代以降の「がん告白」の多くが定期検診の勧めで締めくくられるのに対し、塩沢の訴えは「何といたっても一番悪いのがストレスです」というものである〔塩沢 1992：234〕。つまり、がん心因説をとるという点で、塩沢はがんをめぐる「病気懲罰説」を内在化しているのである。退院後、恋人は「大事な病後だからという口実で」会おうとせず、たまに会っても抱こうとせず、「別れ際のベーズもない」。塩沢は「ひょっとするとこの人は、ガンが伝染すると考えているんじゃないかしら」と考える〔塩沢 1985：61〕。それはソントグが指摘した「伝染」「タブーの侵犯」に重なるエピソードであると同時に、塩沢自身の観念でもある。恋人との別離は、がんが「愛情生活」を奪ったことを意味する。そして塩沢は「だれにもガンで入院していたとはいわずに」仕事に復帰する。「そんなこといったら仕事がなくなる、そう思った」からである〔塩沢 1985：90-91〕。それからの23年間を、塩沢はこう振り返る。

「でも身体が不安だったので、付き人という

ほどではないのですが、近所の人に頼んで付けていてもらいました。

『あら、シオちゃん、付き人さん。えらくなったのネ』

結髪さんにいや味をいわれたけれど、しかたがありません。人前で倒れて『ガン』だったことがバレルよりはいい。明るくふるまうのだ。暗い疲れた顔をしていて、『シオちゃん、どこか悪いんじゃない?』といわれるのがいちばんおそろしい。だれにもいうまい。だれにも気づかれまい。わたしは一生懸命、元気で健康的なイメージをつくるため努力しました。気がついてみたら20年以上、わたしは周囲の人をだまし続けていたのです。〕〔塩沢 1985：91〕

だが告白以降の塩沢は、がん体験の本を出し、そこで自身の恋愛遍歴を披露したことがきっかけとなり、下ネタのトークを売りにバラエティに進出し、女優というよりは大きなポンパドール頭の中年女性タレントとして一躍売れっ子になる。そうしたさなか、塩沢は85年に右乳房にがんを発症し全摘するが、今度は隠蔽するどころか、残った左乳房をはだけて見せるなど、むしろ積極的にがんであることを顕示した。告白して吹っ切れた後の、塩沢のがんに対するあけすけさは当時としては例外的な態度だったが、先述したように、図らずも「がん告白」がブレイクのきっかけになるという前例を提供することになった。がんを告白した後に本を出版し、「がんである／あったこと」がその後の活動の資本になるというパターンは、以後の有名人にも引き継がれているといえよう。

ii) 90年代：逸見政孝

隠蔽から公表へという流れで重要な節目となったのは、逸見政孝の記者会見であった。そのときの映像は今もたまにテレビで流れることがある。逸見がスキルス性胃がんを発症したのは93年初頭である。最初の手術を受けて復帰した際には病名を「十二指腸潰瘍」と偽ったが、再手術と再々手術をへた9月6日の会見で、以下のように「告白」した。

「こういう形での記者会見は賛否あると思いますが、私が入院してから事務所を通じてのコメントを出しますと、真意が伝わらなかったり、あるいは誤解を生じてもいけませんので、私の口から伝えることによって皆さんに集まっていただきました。最初に皆さんにお詫びをしなければならぬのですが、今年の1月から2月にかけて私が入院いたしまして、手術そして退院した時にやはり集まっていただきました。その時に私が発表した病名は大変申し訳なかったのですが、うその病名を発表いたしました。

(略) 本当のことを申し上げます。・・・私が今、おかされている病気の名前、病名は・・・がんです。」

当時の映像を見ても、逸見がその病名を口にする前に一瞬言い淀み、一呼吸置いてから決然と「がんです」と言い切る姿の背後に、ソントグが語る「病いの神話」を見出さずにはおられない。逸見の妻は会見に反対した。妻の妹も「テレビで告白会見をするなんて、ひどすぎる。みんなああガンだったのか、とジロジロ顔を見るわ」と言って泣いたという〔逸見

2003：58〕。身内にとってさえ、がんは恥ずべき病気、隠蔽すべき病気として観念されていたようだ。塩沢もまた、30歳のとき舌がんで入院していたころを述懐し、「何よりわたしは、自分がこんなに若くてガン患者であることが、とって恥ずかしかったのです。廊下を歩くときなんかも、なるべく顔を見られないよう、伏せて歩いていました」と記している〔塩沢 1985：81〕。

逸見の語りは、記者会見で初めて公表されることで、はっきりとメディアを対象にすえた初めての「がん告白」でもあった。逸見自身が「賛否あると思いますが」と前置きしたように、メディアを使った「がん告白」というやり方に対しては、ひどい批判や中傷もあったようだ。すなわち「当時は『ガン発症を記者会見で発表する』こと自体が異例中の異例だったため、一部のマスコミ、週刊誌では『病気をネタにした売名行為』『とても良い営業をしている』などと中傷記事が書かれたこともあった」

(ja.wikipedia.org/wiki/逸見政孝)という。これが仮に他の病気だったら、反応はまた違っていただろうか。「或る現象を癌と名付けるのは、暴力の行使を誘うにも等しい」とソントグはいう〔ソントグ 1978=1992：125〕。相手が病者であることを知りながら、自らを「がんと名乗った」がゆえに中傷を浴びせることもまた、病気懲罰説として患者自身に突き付けられた「暴力の行使」にほかなるまい。

同年、鳥倉千代子が乳がんを公表し、もっぱら温存療法が話題になった。それに先立つ91年、女優を引退していた仁科明子（当時）が子

宮頸がんを公表し、96年に体験記を出版している〔仁科 1996〕。また92年には渡哲也が直腸がんを公表、後に〔柏木 1997〕によって、人口肛門使用者として知られることになる。だがそれ以外、90年代には際だった「がん告白」は見出されない。

90年代まで主流を占めていたがんを隠蔽しようとする意識は、昭和天皇や久和ひとみの例に見るように、がんを「体調不良」「体調の悪化」「体調を崩した」など当たり障りない表現

iii) 2000年代：向井亜紀と子宮頸がん

向井の場合、「病状告白会見を行ない定期健診の大切さを涙ながらに訴え、一躍時の人となった」（傍点・真鍋、ja.wikipedia.org/wiki/向井亜紀）とされている。翌年には著書を出版し〔向井 2001=2002〕、それがコミック化され、さらにはテレビドラマ化された。続いて渡米して代理母出産に臨み、双子の男児の母となった向井は、その経緯も著書にまとめ〔向井2002、2003〕、これもまたテレビドラマ化されている。「がん告白」に対して「病気をネタにした売名行為」「とても良い営業をしている」と中傷された逸見が生還をはたせなかったのに対し、「一躍時の人となった」という皮肉めいた語りが見えるように、がんから生還し、あまつさえ代理母出産にも成功した向井は、確かにがんであることの、がんによって女性生殖器である子宮を失ったということのステイグマを、タレント活動の資本とすることで芸能界を生きのびたことになるのだろう。

田中の場合、それこそ「はい、そうです」とは答えにくい最たる部位であるが、むしろその

に置き換えていた点にも端的に示される。これらの言葉は末期がんに苦悶する「下卑た肉体」を隠蔽し、これを封印しようとするものである。

こうした状況を一変させたのは2000年、向井亜紀（子宮頸）と爆笑問題・田中裕二（睾丸）によるがん公表ではなかったかと思われる。以下、向井のケースを中心に、2000年代以降の子宮頸がんをめぐる「告白」の流れを俯瞰する。

ことを逆手にとり、現在にいたるまで爆笑問題が笑いのネタにしていることは周知の事実である。つまり爆笑問題は、がんによって男性生殖器である睾丸のひとつを失ったという田中のステイグマを、芸人活動の資本のひとつに転じたのである。

ところで向井は著書の最後に「この場をお借りして、もう一度、女性のみなさんへ心から言わせてください。病気の早期発見のため、また、健康を確認するためにも、婦人科検診を受けましょう！お友達同士や、母娘で『そろそろ行ったら？』『〇〇病院がとってもよかったわよ』という会話を当たり前のようにしてほしいと思います」〔向井 2001=2002：213〕と記している。同年刊行の久和ひとみの手記の最後にも、「がんは早期発見できれば治癒する病気。ひとみのように取り返しのつかぬことにならないよう、自分の健康を過信せず、せめて1年に1度は健康診断を受けること」〔久和2001：211〕という母・啓子の訴えが取り上げられる。

一方、夫・逸見政孝の死から1年後に、自らも子宮頸がんを発症した逸見晴恵は、「がんを誰にも知られたくないと思ったのも、弱みを見せたくないという、いささかかわいげのない性格ゆえのことでした」として、「癌研に入院したことは徹底的に秘密にし」、病室で夫の闘病記を執筆する際にも、原稿を取りにくる担当編集者に「ちょっと、ストレスで疲れてしまいました」と入院理由を取り繕い、がんのことは隠し続けたという〔逸見 2003：40-41〕。夫の死後、がん予防やがん治療にかかわる執筆や講演などで生計を立ててきた晴恵の2001年の著作『私ががんを恐れなくなった理由』は、まるで彼女自身のがん体験をも仄めかすような意味深長なタイトルだが、そこでも彼女は「がん体験者、闘病中のかたがた」「がん患者」を他者化する書き方で〔逸見 2001：243-244〕、自身は「がん患者ではないふり」を貫いている。晴恵が夫の記者会見に反対したのも「弱みを見せたくない」という理由によるのだろう。だがそんな彼女が2003年になって突如、『黙っているのもうやめた』と題した本を刊行し、子宮頸がんを経験したことを告白し、やはり最後に「がんを発見できたのは、人間ドックで検診を受けたおかげです。(略)すべての女性が、もっと積極的に婦人科の検診を受けるようになってくださることを願ってやみません」と述べている〔逸見 2003：65-66〕。2001年から03年にかけての間、晴恵の

上に、そして子宮頸がんにまつわる「病いの神話」を作り上げようとする「さまざまの制度」の上に、いかなる状況の変化があったのか。

かつて仁科明子は著書の中で定期検診を勧める言葉はひとつも述べなかったが、離婚後、仁科亜季子として復帰してからは2010年3月に「子宮頸がん予防ワクチン接種の公費助成推進実行委員会」を設立し、共同代表をつとめている。現在は娘の仁美とともにポスターやCMに登場し、まさに向井が記した「母娘で『そろそろ行ったら?』『〇〇病院がとってもよかったわよ』という会話を当たり前のようにしている様子を演じているのである。そして冒頭にあげた原千晶もまた、記者会見で定期検診の大切さを訴える。子宮頸がんの「告白」と婦人科検診の推奨がワンセットになったメディア現象に、なにやら奇妙な暗合を読み取るのは、いささか穿ちすぎた見方であろうか。かつて「隠蔽」されたがん、それも「体の器官のヒエラルキー」の下位の部位にがんを発症した有名人たちが、その事実を「告白」する時代を迎えて、さらにはメディアを通じて「定期検診」「予防ワクチン接種の公費助成」を推奨・推進する役回りを演じるようになった現今、その背後にある利害関係をはらんだなものかの存在を、これらがメディアに食い込み、それぞれの有名人の利害関係とも結びつきながら構造化された状況を、深く探索してみたいという誘惑に駆られてしまう。

2) ソンタグ的な意味における「がんの脱神話化」

2000年以降の有名人の「がん告白」をとりまく状況は、20年以上も秘め続けた塩沢とき

や、記者会見で告白したことが「衝撃」と受け止められ、中傷の対象にもなった逸見政孝らの

時代からすると、隔世の感を禁じえない。それはソング的な意味における「病いの神話」の終焉であると同時に、2000年の向井亜紀を起点として「がんの脱神話化」のプロセスがたどられてきた結果である。石田が「今日の〈有名人〉は、その私生活のあらゆる領域、

i) がんビジネス

夫が書き遺した闘病記に補筆し、完成させることが逸見晴恵の最初の仕事だった。こうして1994年2月に『ガン再発す』が刊行されてのち、早くも同年11月、晴恵自身の筆により患者家族の目から見た闘病記『二十三年目の別れ道』が上梓される。「日本人の死亡の第一位になっているガンについて、もっと関心を持っていただきたい」「患者、患者家族と医師のコミュニケーションをもっと円滑にそして、納得のいくように少しでも改善して行ってほしい」というのが、執筆の動機だったという〔逸見1994=2003:235〕。同時に、二児と家のローンを抱えた晴恵にとって、がんについて書いたり講演したりすることは、すなわち「仕事を持つ」ことであった〔逸見2003:81〕。「がん告白」をきっかけにブレイクした塩沢と場合、がん体験そのものが生計の手段となったわけではない。晴恵の場合、夫のがん闘病と患者家族としての体験を資本とした「仕事」として、自身の子宮頸がん罹患はひた隠しながら、がんに関する執筆や講演などを行なった。彼女

ii) メディア実況型の「がん告白」

2002年12月3日付の『毎日新聞』で「生きる者の記録」と題する連載が始まる。末期の

(略)ありとあらゆる私生活が情報商品として流通することになる」と述べるように〔石田1998:73-74〕、これは「有名人」とその私生活に属する「がん」を結びつけることで発生する情報商品化のプロセスでもある。

この逆説的な態度は、それが食べてゆくための選択だったからこそだが、結果的に「がんビジネス」のはしりとなった。

2000年代以降、向井亜紀を皮切りに、有名人の体験本が雪崩を打ったように刊行されてゆくのも、すでに「がんビジネス」という産業が成り立っていたからであろう。前述したように、向井の著書はコミック化され、テレビドラマ化されている。また2000年のがんを告知された元NHKキャスター（当時・池田裕子）の絵門ゆう子は、末期がんに蝕まれた2003年に闘病記を発表して以降、06年の死にいたるまで、がんに関する執筆と講演を本業とし、テレビにも頻繁に出演していた。逸見晴恵を嚆矢とした「がんビジネス」は向井をへて、絵門によって確たる市場を獲得したといえるだろう。

定期検診や予防ワクチン接種を呼びかけるCMに登場する、著書や講演会で闘病体験を語るなど、現在、「がんタレント」の活動の場は確実に広がっている。

食道がんに冒された記者・佐藤健が、「末期がんになった者にしか書けないルポを残したい」

〔佐藤健と取材班 2003：8〕という強い思いから、自らの生と死をルポするもので、26日未明に容体が急変してからは同僚記者が書き継ぎ、連載は31日付で終了した。がん治療の内容や玉川温泉での湯治の様子、その時々体調や気持ちの変化など、自分で自分のがん体験をリアルタイムでルポするという異色の、そして初めての試みであった。連載中の反響は大きく、放送タレントの永六輔も「なんと幸せな記者だろう」と題したメッセージを寄せている。

「今『生きる者の記録』を読みながら『うらやましい』という心で一杯である。

新聞記者として自分の命をレポートし、その反響の中で、ペンを走らせることが出来るなんてうらやましい。

そのコラムが読ませるだけに、さらに、うらやましい。

そして、きっとそうなると思うが、多くの読者に看取られて、ペンを置くことになったら、口惜しいほどうらやましい。

読者に看取られるなんて・・・なんと、幸せな記者だろう。」〔佐藤健と取材班 2003：92-93〕

佐藤は、自ら雲水（修行僧）となることで、宗教の内側から宗教を問うた連載「宗教を現

iii) 肉体性を超えて

2001年に虫垂がんを発症した岸本葉子が、がん発症と治療経過、予後をつぶさに綴った『がんから始まる』を上梓したのは2003年のことである。その内容は、（少なくとも私に

代に問う」（1976年）で名を知られた記者である。こうした「文化人類学的な視点からのルポルタージュ的手法を身上として歩んできた」〔佐藤健と取材班 2003：8〕佐藤にとり、「生きる者の記録」はその延長上に位置づけられるものにすぎないだろう。

だがそんな佐藤に対し、永は「うらやましい」を繰り返す。これは同じメディアに身をおく者としては、極めて率直な感慨であろう。「うらやましい」か否かの真意はさておき、佐藤の死後、2人の著名ジャーナリストによって、自らが籍をおくメディアを使い、自らのがん体験を実況するというスタイルが提示されたことは注目に値しよう。

鳥越俊太郎は2005年10月、レギュラーアンカーを務める『スーパーモーニング』で、本人からの直接電話で直腸がんを告白し、3日後に手術を受けた。07年9月、同番組にて肺への転移を明かし、さらに09年2月、同番組で肝臓への転移を公表した。鳥越の2度目の告白に前後して、筑紫哲也もメインキャスターを務めていた『NEWS 23』で07年5月に肺がんを告白、10月に番組復帰している。筑紫は08年に死去したが、今も健在の鳥越は闘病中の様子をCMに流すなど、「生きる者の記録」さながらに、自らのがん体験をリアルタイムでルポし続けている。

とって）東大出の「清楚な美人」という岸本のイメージを大きく覆すものであった。たとえば、がんの兆しを覚えた手術の1年前の出来事。

「土日と寝ていて、熱はやや下がったものの、排便は言うまでもなく、排尿のときでさえ、管の中を通過するものが腫れ物にこすれ、痛みを覚えたほどである。

のちに手術したところ、尿管にも炎症の痕があったことからして、痛みは気のせいではなく、正確な感じ方だったといえるだろう。」
〔岸本 2003：11-12〕

あるいは予後、サポートグループで共有された「便通問題」に関するくだり。

「誰かの自己紹介で『便通』の話題が出たときから、私はもう膝を打って、深く深くうなずいてしまった。

消化器を切ってしばらくは、程度の差はあれ、便通のコントロールが難しくなる。その人は会社員だが、駅ごとにトイレはどこか、改札の内か外か、ホームなら何両め付近かまで、頭に叩き込んでいたという。私も通勤こそしていないが、ふだん買い物などに行く、徒歩十分圏内の店でも、それぞれのトイレの位置や、温水洗浄器付き便座の有無まで熟知していた。」
〔岸本 2003：216〕

発症部位が消化器系なだけに、岸本の筆致は「体の器官のヒエラルキー」を超越して、がん

iv) WEB告白と内視鏡手術

ソング的な意味における「がんの脱神話化」を加速させた要因として、「がん告白」を行なう新たなメディアとしてHP、ブログ、ツイッターなどを介したWEB告白が可能になっ

のはらみもつ「下卑た肉体」を生々しく押し出してくる。女優の洞口依子は、子宮頸がんの全摘手術後に繰り返される残尿測定をなんとか楽しもうと「あたしのおしっこ」と題した詩を作り、最後に「あたしのおしっこ／しっこしっこしっこしっこ」と絶唱(?)する。洞口が「おしっこ時計や詩を書いたり」し、「おしっこを自分でコントロールできないなんてことが信じられない」と語るのは〔洞口 2007 154-157〕、排泄コントロールという下の問題、切実な肉体の問題という点で、岸本の「便通問題」と同種である。

一方、2002年に今上天皇の前立腺がんが公表されたという事実にも注目したい。昭和天皇の「体調不良」が公表された後、歴代天皇で初めて「手術を受けた」ことが大きな話題となったが、がんという病名は最期まで秘匿された。13年後、天皇のがん罹患と手術にまつわる話題は当たり前のように公表された。しかも部位は前立腺である。さらに06年には皇太子の「大腸ポリープ切除」が公表されている。こうした皇室をめぐる変化は、日本において、がんをめぐる「体の器官のヒエラルキー」や「下卑た肉体」といった「病いの神話」が、崩壊したことを決定づけたといえるのではないだろうか。

たこと、内視鏡手術という新たな治療技術が普及したことで、部位によっては外科的治療を回避することが可能になり、治療が格段に簡便化したことがあげられる。

たとえば2002年、宇多田ヒカルとhitomiは内視鏡手術で卵巣腫瘍を切除したことを、WEBで明かした。2003年に肺がんを公表した吉田卓郎も内視鏡手術を受けたという。

一か所に報道陣を集めてひな壇の上から行なう記者会見が、時に記者たちとの丁々発止を繰り広げ、まともに批判や中傷を浴びることもあるのに対し、WEBでの語りではそれほどの重圧感をともなわずに済むであろう。外科的イメージをともなわない内視鏡手術の簡便さは、がんにつきものの肉體性を直視しなくて済む。そして宇多田、hitomiの両者がともに卵巣腫瘍を患い、卵巣のひとつを切除し、手術に前後して結婚したことは、「下卑た肉體」や「体の器官のヒエラルキー」を超越して、あるロマンチックな幻想を人びとに提供する。詳細は後で述べるが、その結末は冒頭にあげた原千晶の会

見にも明らかであろう。

前項で取り上げた岸本や洞口による肉體性の超越は、これまで隠蔽されてきた消化器系や婦人科系のがん患者の肉體的事情、その身も蓋もなさを自ら露わにすることで、がんをめぐる「病いの神話」を無化することを意味した。現人神ならぬ天皇までが前立腺がんを公表されたことは、いかにも象徴的な符合である。一方、同じ婦人科系でも宇多田やhitomiによるそれは、WEB告白と内視鏡手術によって、卵巣という女性生殖器にまわりつく肉體性が極限まで薄められることでもたらされた、いうならば「肉體性の浄化・無臭化」である。方向性は異なるが、いずれも「下卑た肉體」や「体の器官のヒエラルキー」を超越したという点では、がんをめぐる「病いの神話」の脱神話化といえるだろう。

3) そして、「がんの再神話化」へ

今世紀における有名人の「がん告白」をたどると、いったんは脱神話化されたがんが、新た

な語りにより、再神話化されてゆくプロセスが見て取れる。

i) 男性性の神話—天職

がんをめぐる「男性性の神話」には、すでに松田優作という原型が存在した。1988年にハリウッド映画『ブラックレイン』に抜擢され、撮影中に膀胱がんを宣告されたが、延命治療を拒み、がんの事実を伏せて撮影に臨む。そして89年に死亡した。2002年に胃がんを発症した元チェッカーズの高杢禎彦は、がん宣告と時期を同じくして昼帯の連続ドラマへのレギュラー出演を打診される。彼は自分の境遇を松田になぞらえながら考える。

「でも、体調は下降線。こんなとき、俺は無意識に松田優作さんの姿を思い出していた。たしか、彼が亡くなったのは39歳だ。俺とほぼ年齢がピッタリ。優作さんの生き方が俺の頭の中を駆け巡った。

でも、むこうは遺作になったのが、ハリウッド映画の『ブラックレイン』。主演はマイケル・ダグラス、日本からは高倉健さんらも出演した作品だ。優作さんの役もニヒルな殺し屋で、凄くカッコ良かった。おまけにガンである

ことを誰にも告げずにこの作品に命を賭けた訳だ。

対してこの俺は、遺作になるのが『はるちゃん6』の番長役。

(略)

でも、俺、考えた。『(略)これが最後に残る自分の映像になる確率が高い。それじゃ今まで以上に気合いを入れて、最高の役を演じてやる』と。自分に固く言い聞かせた。そして、誓った。』〔高杢 2003:29〕

松田を男性性神話のモチーフとしながらも、2000年代以降は、WEBというメディアを介した「がん告白」が主流を占めるようになる。

3人の大物男性ミュージシャンが、3～4年の間隔をあけて、がんを発症した。2003年に吉田拓郎が肺がんを、2006年に忌野清志郎が咽頭がんを、2010年に桑田佳祐が食道がんを公表したのである。肺と咽頭は「体の器官のヒエラルキー」の上位にあたる部位である。食道は消化器系とはいえ、胃や腸ほどには「下卑た肉体」を感じさせない部位ではないだろうか。3人のがんをめぐる、もっぱら取り沙汰されたのは「声」である。呼吸器系の病気が発声に支障をきたすのはいうまでもなく、吉田はがんから生還した後も「声」のためにツアーを中止したことがあり、そのたびにメディアは大きく取り上げた。忌野は「声帯を残すため」との理由から外科手術を回避した結果、09年に死亡した。そして2010年8月に手術を受けた桑田について、ネットニュースは次のように報じている(Sponichi Annex、2010年8月5日付)。

「術後の経過も良好といい、所属事務所は『麻酔から覚めてすぐに声が出せたり、翌日には少し歩いたり、担当の先生も驚かれるほどの回復を見せております』と説明。

(略)

桑田はラジオ番組で担当医に『1年後にはステージに立てるでしょう』と言われたと明かしており、ライブ復帰の時期は1年後をめどにリハビリやボイストレーニングなどを進めていくようだ。」

桑田の食道がんを「声」に結びつけた語りは、「桑田佳祐、食道がん。声帯に影響を及ぼす可能性も・・・」(2ちゃんねるコメントNEWS、2010年7月29日11時34分付)と題したブログ記事にも現われる。

歌い手にとって「声が出せること」とは、つまり「天職をまっとうできること」である。忌野は「声」のために手術を受けず、ために命を失った。彼の死はいわば「声」に殉じたものであり、ミュージシャンという天職をまっとうするために自ら選びとられた死という点で、彼は「殉職者」なのである。その意味で、忌野の死は松田の神話をなぞっている。両者の違いは、がんを発症した部位が、頑なに治療を拒んだ部位が、天職と直接かかわるか否かである。食道がんの手術によって声を失う場合のあることは事実だが、ことさらに桑田の食道がんが「声帯に影響を及ぼす可能性」を喧伝される基盤には、忌野がその死によって形作った天職をめぐる「男性性の神話」があったのではないだろうか。

付言すれば、先に引用したネットニュースには「妻で歌手の原由子(53)は手術室近くを

離れず、術後も献身的に付き添った」とも記され、「男性性の神話」を補完する。忌野の死はいうまでもないが、吉田、桑田の身体に刻まれた手術痕は「聖痕」として神話化されるはずである。かくして、がんをめぐるひとつのカリスマの形が顕示される。

ツイッターで「下垂体腺腫」を告白した平野綾が、「手術も検討したが、鼻の穴を砕く必要があり、声質が変わってしまうので声優としてできないと判断した」ことを明かすとき、そこに既視感を覚えるのは、忌野の死と桑田のがん公表が極めて直近の過去であるゆえんだろう。声優の平野が手術を受けなかった理由は「声」にあり、忌野と同じである。その真意はさてお

ii) 女性性の神話－愛情生活

2002年、奇しくも3人の女性ミュージシャンが、そろって婦人科系のがんを公表した。宇多田ヒカルとhitomiの卵巣腫瘍（いずれも良性）、そして平松愛理の乳がんである。平松はがんを公表するにあたり、実はデビュー時から重い子宮内膜症を患っており、出産後の96年に子宮全摘手術を受けていたことを「告白」した。がんではないが、子宮内膜症という病名にからみつく生々しい肉体イメージと、子宮全摘という女性としてのスティグマは、子宮がんと通じるものがある。当時、子宮内膜症による全摘手術の事実を秘匿したのは、おそらくがんと同じ理由によるのであろう。

偶然とはいえ、宇多田もhitomiも内視鏡による卵巣摘出手術に前後して結婚した。平松は既婚者で、子供もおり、子宮と乳房を失くしても愛情生活までは失っていない（かに見えた）。

き、結果として平野の「告白」は、忌野の死が端的に示す「男性性の神話」をなぞることになった。さらに平野の「告白」には、以下に述べる「女性性の神話」とも通底する重要な含意が見出される。それはある意味、最も「反知的な細胞」を連想させる「脳の腫瘍」を平野が明かしてみせたことにある。これはスティグマ以外のなにものでもなく、ゆえに平野の「告白」は自己スティグマ化となる。自身のスティグマをあえて明示することで、それへの対抗評価ひいては価値逆転を促して、さらなるカリスマの高みへの跳躍を期しての語りだったとも受け取れる。少なくとも構造的には、そのように読み解くことが可能である。

後年、3人とも離婚することになるのだが、当時、3人の「告白」はどのように受け止められたであろうか。卵巣、子宮、乳房を失っても愛してくれる、結婚してくれる／配偶者のままでいてくれる人がいる、という事実。平松のヒット曲「部屋とYシャツと私」さながらの、ロマンチックな幻想を喚起したのではないか。がんによる女性特有の部位の喪失は本来ならスティグマとされたことだろう。90年代に平松が子宮全摘を公にしなかったように、それは隠蔽されるべき事柄であった。しかし向井亜紀以降、それは自己スティグマ化として積極的に語るべきこととなり、さらに結婚とワンセットで語られることで、手術痕は「聖痕」となり、彼女たちは愛情生活にも仕事にも成功した女性たちのカリスマに上りつめる。当時は宇多田、hitomiともに売れっ子であり、平松には「部屋とY

シャツと私」のイメージがいまだ濃厚に付帯していただけない、3人の告白は「女性性の神話」として受容されたと考えられる。

女性特有の部位にがんを発症し切除しても、愛してくれる男性がいるという幻想は、がんを体験した女性有名人たちの著書のパターンにも反映されている。闘病を支えた夫の愛情に感謝の言葉が述べられていたり〔洞口 2006、山田 2007〕、夫が往復書簡の形式で共同執筆者となったり〔村井・音無 2004〕、闘病中に交わされた夫婦の携帯メールの原文や、夫による特別寄稿が付録として掲載されたり〔向井 2001=2002〕、といった具合だ。

活字を通して彼女たちが語りかける「女性性の神話」の幻想の果てに、ベストセラーとなり映画にもなった『余命1カ月の花嫁』（2007年）がある。23歳で乳がんと診断され、同じころに出会った男性から「一緒にがんと闘おう」と交際を申し込まれ、闘病した長島千恵という女性の実話である。「余命1カ月」の宣告を受けて、男性の方から結婚式が提案され、実際に「余命1カ月の花嫁」となった。その最期の1カ月間をTBS「イブニング・ファイブ」取材班が追ひ、死後、ドキュメンタリー番組「余命1カ月の花嫁」として放映された。番組には大きな反響があり、700通ものメールや電話、手紙が届き、「一つの番組にこれだけの感想が届くのは極めてまれなことだ」という〔TBS「イブニング・ファイブ」編 2007: 218〕。単行本『余命1カ月の花嫁』は初版からわずか4ヶ月半で15刷を重ねた。

以上が、冒頭に引いた原千晶の記者会見に至るまでの、「女性性の神話」形成のプロセスで

ある。仁科、平松、向井、洞口、山田、音無は、いずれもがん発症時、既婚者であり、洞口と山田を除いては子供もいる。卵巣摘出と前後して結婚した宇多田とhitomiの場合、腫瘍は良性で命に別条はなく、また切除されなかった方の卵巣が機能すれば、出産は十分に可能である。だから病気が結婚の妨げとなるリスクは低い。だが、原の場合は違う。闘病中に会った男性が支えてくれた。そして、がんが再発し、子宮全摘したにもかかわらず、「君が元気になってくれるのが一番の幸せ」と求婚してくれた。末期とはいわずとも、モチーフとして「余命1カ月の花嫁」が透けて見えるようである。

総じて「男性性の神話」では、がん発症の部位と「天職」との関連性に注目が集まるようである。対して「女性性の神話」を構成するのは婦人科系のがんであり、「愛情生活」の実現が最大の関心を集めている。「男性性の神話」に取り上げられたがんは「体の器官のヒエラルキー」の上位に位置し、それが天職にかかわるものであるがゆえに、スティグマとはならない。たとえば忌野が咽頭がんに罹ったことは、恥ずべきことであるどころか、長年にわたり、あのしゃがれ声を酷使したことが彼の喉を疲弊させたというふうに、職業病的なある種の「勲章」として語られるにちがいない。喉を潰した演歌歌手がポリプ切除手術を受けるときの、メディア（特にワイドショー）の好意的な報じ方を想起されたい。それに対し「女性性の神話」では、婦人科系のがんにまつわる「下卑た肉体」のイメージ、生殖機能の喪失という現実的な問題を対抗評価し、価値逆転させるための

自己スティグマ化のプロセスが不可欠となる。そして、これら二つの神話を同時に実現しようとしたのが、平野綾のツイッター告白であったと位置づけられよう。

かくして今世紀の日本にあって、がんは新たな「隠喩としての病い」として再神話化され、「聖痕」を刻まれた有名人たちは堂々と明るくがんを語り、互いを「がん友」と称している〔山田 2007:174〕。

山田邦子の著書に挿入されたコラム「私の入院グッズはコレでした!」では、「必須アイテム」「病院によっては必要なもの」「できたら持っていきたいおすすめグッズ」「あったら便利なグッズ」として、山田の私物の数々が公開され〔山田 2007:91-94〕、またコラム「術後の必需品」ではホルモン剤の錠剤とピルケース代わりのジュエリーバッグ、ピンクリボン（乳がん専門の啓発キャンペーン）のピンバッジ、愛用している下着などの私物が写真掲載される〔山田 2007:175-176〕。私物の小物類を「アイテム」や「グッズ」と称し、キャプション入りの写真で紹介するスタイルは、女性ファッション雑誌の誌面を彷彿させる。2009年にモデルのMAIKOが上梓した『モデル、40歳。乳がん1年生。』の構成は、ファッション雑誌そのものである。抗がん治療で頭髪の抜けたMAIKOの写真が表紙を飾

おわりに

今世紀以降、日本におけるがんの観念が、いかにソクタグ的な「病いの神話」を解体し、再神話化に至ったかというプロセスを、有名人の

り、巻頭のカラーページには酸素マスクを装着した術後間もない姿とともに、入院中に友人から贈られたフラワーアレンジメントや、入院中に着用したシューズなどの写真が配置され、次に「脱毛してもオシャレに過ごしたい!」と題してウイッグやスカーフ、帽子などを、さまざまなアレンジでMAIKO自身が着用してみせるページと、抗がん治療による便秘、だるさ・倦怠感、味覚障害、むくみ、食欲不振に対応するという「抗がん治療中の簡単クッキング」と称する料理コーナーのページが続く。

一方、高空の著書では、腹部を大きく横断する手術の切り傷、ベッドに横たわるその抜糸前の裸体の写真が、「手術の跡」とのキャプションで、章の扉に掲げる写真のひとつされている〔高空 2003:21〕。さらに仄聞するところでは、乳がん患者のヌード写真集が発表されたこともあるという⁵。

ソクタグの「服装（身体を外から飾る衣裳）と病気（身体の内側を飾るもののひとつ）」とは、自我に対する新しい態度の比喩となった〔ソクタグ 1978=1992:40-41〕という指摘を想起すれば、再神話化されたがんは、今や文字通り「ファッションとしての病気」に転じたかのようでもある。それは平野綾の「告白」に、「僕も小さい頃同じような病気を持ってました」と呼応するファン心理にも通じている。

「がん告白」に照らして読み解いてきた。確かに2000年を境として、がんはソクタグ的（=20世紀的）意味では脱神話化をとげ、さらに

「男性性／女性性」に二極化しながら再神話化されてきた。

しかしまだ、重要な問いが残っている。ソングは、がんは叙情詩の素材にならないと断言したが、これに対するレスポンスをどうするかという点である。

結核が魂を霊化する病いとして叙情詩の素材になるとすれば、「下卑た肉体」性を帯びた婦人科系のがんなどは、品性ある病いとして叙情詩に詠まれることはありえないのか。乳房の喪失、子宮全摘による月経の喪失などは、目に見える「聖痕」として昇華されやすいであろうから、たとえば「抗がん剤で抜け落ちた黒髪に、乳房に子宮を喪失した女たちよ／“性”という人間の生々しい煩惱と闘い、諦念し、そのはてに愛欲の業から解放された女たちよ／貴女たちの美しさは菩薩のようだ」（真鍋の試作による）などと、婦人科系がん患者たちの精神性と品格を称えるべく、仏教用語を散りばめた詩が叙情的に詠まれる可能性は十分にある。前記した乳がん患者たちのヌード写真集などは、まさにそうした叙情詩の表象でもあるだろう。しかし、私には受け入れがたい。そこには術後も続く後遺症の苦しみや、血と膿で膨れ上がりケロイド状になった手術痕の生々しさ（これは私の母のことである）といった、「下卑た肉体」の呻きのようなものが捨象されているからだ。

このような形でがんが再神話化されるとすれば、それは、がんがもたらす真の精神的、肉体的な苦悶の真実を覆い隠すことである。さらには、病巣をはらんだ乳房や子宮を切除したくてもできない人々の存在をも覆い隠すことである。女性有名人のがん患者たちは、「がんを

病んで乳房や子宮を失っても愛される私」をアピールし、神話化し、「余命1カ月の花嫁」や原千晶がそういうロマンチックな「病いの神話」の象徴となった。だが実際のところ、「腹は借り物」という伝統的な性の意識に縛られて、愛情生活を失うことを恐れて治療をためらう女性の方が多いのではないだろうか。また女性有名人のがん患者たちは、すでに世にも際立つ仕事を持ち、加えて自らのがん体験を資本に執筆や講演を行なうことで、利潤を拡大再生産することのできる恵まれた人々である。単純に経済的な事情から、彼女たちが受けたのと同じレベルの治療を誰もが受けられるわけではない。特に女性性をめぐる「がんの再神話化」には、がんがもたらす苦悶の真実を隠蔽し、がんによって愛情生活を奪われたり、伝統的な性意識や経済的な事情によって治療の機会を逸したりする、無数の弱い立場の者たちの存在を無化するという意味で、真綿で首を絞めるような暴力性が内包されている。

だからこそ、がんは「下卑た肉体」から絞り出されてくる詩を必要とする。管見の限り、その先駆は1964年に食道がんで没した高見順の詩集『死の淵より』であろう〔高見 1971＝1993〕。

既述のように、洞口依子は残尿測定之苦痛を紛らわすため、叙情的な文体で「あたしのおしっこ」という詩を作った。

「四時間おきにねらわれてるよ／あたしのおしっこ／二時と六時と十時／朝昼晩とねらわれてるよ

寝てもいられない四時間おきに／トライアン

グルな時間に／あいつにもこいつにもねらわれて
てるよ／あたしのおしっこ

おしっこカップにエルドラドな七十八CC／
もっとちょうだいよ神様／あたしだけに／あた
しのおしっこ

四時間おきに渡さないよ／あたしのおしっこ
／二時と六時と十時／朝昼晩と渡さないよ

自分でしーと出来るように／トライアングル
な時間に／あいつにもこいつにも渡さないよ／
あたしのおしっこ

しっこしっこしっこしっこ」〔洞口
2007：155-156〕

2010年に乳がんで亡くなった歌人・河野裕
子は、発病から、再発、そして死に至るまで、
「がん短歌」を詠み続けた〔河野 2002、
2008、2009など〕。いくつか引用してみよう。

二人子を養ひくれし双乳の左傷つけば右が励
ます

ああ寒いわたしの左側に居てほしい暖かな
体、もたれるために

わが乳の癌の塊を膿盆に見しは君のみ 見し
とのみ言ふ

あんなにも抜け続けるし髪たちは悲しかった
らう生きてまま抜けて

癌になりしわたしは癌で死ぬるのか痺れし腕
にまた点滴が

河野の作品は、がんの肉体性の哀しみを生々
しく描出する叙事詩であると同時に、洞口の直

截にすぎる表現に比べれば、がんが表徴する
「下卑た肉体」をぎりぎりまで削ぎ落とした叙
情詩でもある。肉体性でもなく、精神性でもな
く、がんが人の生にもたらす真実を丁寧に描写
する営みが、「がん短歌」という表現だったの
ではないだろうか。

そして最後の歌集となった『葦舟』で、河野
は次のように申し立てる。

彼女らはみんな乳癌患者といふ患者山羊なら
ず羊ならず

河野がいう「彼女ら」とは誰であろうか。単
に医療従事者を指すわけではないだろう。有名
人を「乳癌患者」として情報商品化すること
で、がんの神話を生産し、消費し／され続ける
「彼女ら」も、そこには含まれているのではな
いか。私はこの一首を、乳がん患者自身の言葉
による、いかなる神話からも自由でありたいと
いう意思の表明と受け止める。「山羊」「羊」
とは乳がん患者をイメージした隠喩であり、そ
れ自体がひとつの神話である。そうした鑄型で
患者たちを表象することは、それぞれの「がん
人生」を生きている人々の人格を封じ込める暴
力にほかならない。

これは乳がん患者であるソンググが投げかけ
た「病いの神話」というテーマに対する、ひと
つの応答のかたちとして、同じ乳がん患者の河
野から返された叙情詩である。本稿で述べた
かった結論も、結局のところ、この河野の一首
に尽きるといってよい。

註

- 1 2010年10月18日～11年1月31日開講。外部講師として赤座英之（先端科学技術センター特任教授）、河原ノリエ（同特任研究員）、増井徹（独立行政法人医薬基盤研究所 難病・疾患資源研究部部長）、池映任（東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター研究員／先端科学技術センター協力研究員）の4氏を招聘した。シラバスについては<http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/edu/index.php/Searchs/detail/?id=262>参照。
- 2 富山太佳夫訳では「癌」と表記される。本稿では医学的意味に限定された悪性腫瘍としての癌ではなく、良性・境界性も含めた広義の腫瘍、そしてメディアが醸成するイメージの産物としてのそれを、「がん」と表記する。文中で癌と記載したものは、引用のみであることを断わっておく。
- 3 興味深いことに、医師の竹中文良は「およそロマンとは程遠い」がんと対比させ、結核について次のように記述する。「医学的視点から外れてこの病気に罹った患者の生活を眺めると、結核にはまだ具体的な治療法が確立していなかったせいだと思うが、何処となくロマンの香りがあった。抜けるように青白い顔、麗人、失恋、血染めのハンケチといった、小説『不如帰』に出てくるような場面が頭に浮かぶ」〔竹中 2006：262〕。これはソクタグと全く同じ指摘であり、日本の文脈に配慮しつつも、『不如帰』をはじめ、結核にまつわる「病いの神話」を解体するための文芸批評もなされる必要があるように思われる。
- 4 ソクタグはこの言葉は取り上げていない。肝臓がん治療のひとつである「肝動脈塞栓療法」に関する解説で、「太い管を太ももの動脈から肝臓の中を走る肝動脈にまで挿入し、肝臓がんの組織に近いところで、1～2ミリ角のゼラチンなどの小片を血液中に放出する。小片は細い血管に入り込んで詰り物となり、その先に血液が行かなくなる。肝動脈から栄養を得て増殖するがん細胞は、栄養源を絶たれて壊死する。城を囲む兵糧攻めと似ている」（傍点・真鍋）という記述が見られる〔佐藤健と取材班 2003：62〕。日本的な言い回しの戦争用語が、がん治療の比喩として援用された例といえよう。
- 5 河原ノリエ氏からの私信による。おそらく2010年11月刊行の荒木経惟の写真集『いのちの乳房』（赤々舎）を指したものと思われる。「乳房再建手術」を経験した19人の女性たちのヌード写真集である。それに先立つ2004年、すでに荒木は乳房全摘した宮田美乃里の写真歌集『乳房・花なり。』（ワイズ出版）で、宮田のヌード写真を撮っている。

引用文献

- 石田佐恵子、1998『有名な性という文化装置』勁草書房
- 逸見晴恵、1994=2003『二十三年目の別れ道』扶桑社文庫
- 、2001『私のがんを恐れなくなった理由』扶桑社
- 、2003『黙っているのもうやめた』日本医療情報出版／星雲社
- 逸見政孝（補筆・逸見晴恵）、1994『ガン再発す』廣済堂出版
- 柏木純一、1997『渡哲也 俺』毎日新聞社
- 河野裕子、2002『日付のある歌』本阿弥書店
- 、2008『母系』青磁社
- 、2009『葦舟』角川書店
- 岸本葉子、2003『がんから始まる』晶文社
- 久和ひとみ、2001『絶筆—子宮がん闘病116日の日記』小学館
- 児玉隆也、1980『ガン病棟の九十九日』新潮文庫
- 佐藤健と取材班、2003『生きる者の記録 佐藤健』毎日新聞社
- 塩沢とき、1985『愛ときどき涙』講談社
- 、1992『がん人生』データハウス
- スーザン・ソクタグ、1978=1992『隠喩としての病い』スーザン・ソクタグ（富山太佳夫訳）『隠喩としての病い エイズとその隠喩』みすず書房
- 高見順、1971=1993『死の淵より』講談社文芸文庫
- 高杢禎彦、2003『チェッカーズ』新潮社
- 竹中文良、2006『解説『新患者学入門』』岸本葉子『がんから始まる』文春文庫
- TBS「イブニング・ファイブ」編、2007『余命1カ月の花嫁』マガジンハウス

- 富山太佳夫、1992「訳者あとがき」スーザン・ソントグ（富山太佳夫訳）『隠喩としての病い エイズとその隠喩』みすず書房
- 仁科明子、1996『いのち煌めいて』小学館
- 洞口依子、2007『子宮会議』小学館
- MAIKO、2009年『モデル、40歳。乳がん1年生。』KKベストセラーズ
- 向井亜紀、2001=2002『16週—あなたといた幸せな時間』扶桑社文庫
- 、2002『プロポーズ—私たちの子供を産んでください』マガジンハウス
- 、2003『会いたかった』幻冬舎
- 村井国夫・音無美紀子、2004『妻の乳房—「乳がん」と歩いた二人の十六年』光文社
- 山田邦子、2008『大丈夫だよ、がんばろう！』主婦と生活社

真鍋 祐子（まなべ ゆうこ）

1963年生まれ

[専攻領域] コリアン・スタディーズ

[著書・論文]

著書:『増補 光州事件で読む現代韓国』（平凡社、2010年）、『烈士の誕生』（平河出版社、1997年）、他。論文:「アイデンティティ・ポリティクスとしてのナショナリズムとツーリズム—中国東北部における韓国のパッケージ・ツアーの事例から」（『文化人類学』74-1、2009年）など。

[所属] 東京大学大学院情報学環／東洋文化研究所教授

[所属学会] 日本文化人類学会、日本社会学会、「宗教と社会」学会など。